

194. 平成3年度滋賀県下における

発掘調査の紹介 その1

本年度も、平成4年3月7日(土)、「第60回滋賀県埋蔵文化財センター研究会」が、埋蔵文化財センターで開催されました。

県下では、本年度も数多くの発掘調査が実施され、貴重な成果を上げています。その成果の一端であります30件の調査発表を紹介いたします。

今後の参考として御活用いただければ幸いです。尚、御多忙の中、御協力いただきました方々に厚くお礼申し上げます。

1. 大津市北郊寺院盛衰の歴史

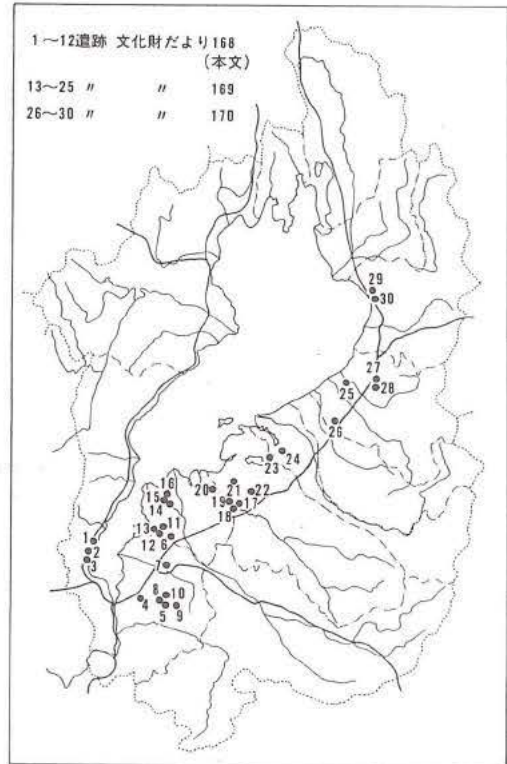
大津市穴太 穴太遺跡

穴太遺跡は西大津バイパス建設に伴う調査等これまでの多くの発掘調査によって、縄文時代から平安時代に至る複合集落遺跡であることが判明している。なかでも昭和59年に検出された大津宮前後の時代に創建、再建された二時期の寺院跡、いわゆる穴太廃寺については現在も諸説が議論されているところである。

検出された建物は再建講堂の北東方向約30mに位置し、東西の3間(約5.4m)、南北2間以上(約4.4m以上)の礎石建物である。その方位が再建伽藍と同一であることから再建主要伽藍の北方に位置する一連の建物跡と考えられる。礎石の大きさは最も大きいもので約1



検出された礎石建物跡



遺跡位置図(位置図の番号は本文と同じです)

mを測る。

建物周囲は全て焼土化しており、礎石についてもいずれも火を受けている。このため、柱が立っていた部分が円形に焼け色が違っており、柱の直径が約45cmあったことがわかる。

建物の性格については今後の検討を待たねばならないが、基壇をもたない総柱建物であることや伽藍における位置などから「倉庫」が想定される。

また、焼土より11世紀前半の土器類が出土していることで建物の廃絶時期が判断されるとともに、焼土を埋める上層(明灰色砂質土)より12世紀後半代の土器類が出土していることから、これまで解明されていなかった穴太廃寺の廃絶過程を把握できる資料として注目される。

それは、崇福寺・梵釈寺・南滋賀廃寺等の諸寺院の衰退過程とも時期的に一致し、しかも延暦寺・園城寺

の隆昌期とも時を同じくするものであり、古代から中世への胎動渦巻く中、大津市北郊寺院に起った古代寺院再編成の運命にのみこまれていった穴太廃寺の瓦解してゆく姿が、焼土の向こうに映し出されているのではないだろうか。

(財滋賀県文化財保護協会 清水 尚)

2. 剣菱形杏葉が完形で出土

大津市^{しがきと}滋賀里 ^{だいとうじ}大通寺古墳群

大通寺古墳群は、比叡山地の東側山麓部に数多く分布する古墳群の一つで、おぼろ池川の形成した扇状地の扇頂部から扇中部にかけて立地している。

この古墳群についての発掘調査は、昭和43年度と昭和52・53年度そして平成元年度に実施されており、26基の横穴式石室が確認されている。今回の発掘調査においては、12基の横穴式石室が検出された。そのうちの2基は大津市教育委員会によって昭和52・53年度に発掘調査されたものであることから、新たに確認された古墳は10基ということになる。

検出された横穴式石室の大半は石積みの上半部が削平されており、かろうじて石室の基底部付近が残されている状況のものがほとんどであったが、石室基底部の構築状況や床面構造についての情報を得ることができた。

調査した12基のうち、玄室の床面に敷石をもつものが7基みられた。この地域の敷石の特徴は、偏平な面をもつ石材によって床面を整える点をあげることができ、拳大程度の河原石等を敷きつめた礫床とは趣を異にし、この地域にみられる横穴式石室の系譜・伝播経路を考える上で留意すべき点の一つといえる。

出土遺物は、須恵器・土師器などの土器類が中心で、炊飯具形土器を出土したのは1基のみであった。その他には、耳環・かんざし・馬具、棺釘などがみられる。このうち馬具には、ほぼ完全な形で出土した剣菱形杏葉2点が含まれている。馬具を出土した古墳は大通寺古墳群中に3基あり、この地域の他の古墳群と比較較



剣菱形杏葉出土状況

討していく際、この古墳群の個性の一つとしてとらえるべきものといえる。

(財滋賀県文化財保護協会 大崎 哲人)

3. 後期群集墳解明に新資料

大津市^{たいこづか}滋賀里 ^{たいこづか}太鼓塚古墳群

本調査は市営住宅改築に伴う事前調査として、平成3年3月から着手した。調査対象面積約5,000㎡、うちD区(約1,700㎡)の調査が完了し、現在A、B区の遺構実測とC区の掘り下げを行っている。

今までの調査で、D区から横穴式石室墳13基、竪穴式小石室3基、土器棺1基、A区から横穴式石室墳3基、B区から横穴式石室墳6基、土器棺1基、土壇墓1基、現在調査中のC区から横穴式石室墳2基、竪穴式小石室2基、土壇墓5基、溝状遺構1条などを検出した。これに伴って、石室に納められた副葬品を中心に、多量の遺物が出土している。副葬品は土器類が大半で、ほかに鉄製品・銅製品・銀製品・ガラス製品がある。

土器類には須恵器脚付子持壺(蓋付)・器台・各種高杯・横瓶・提瓶・平瓶・広口壺・短頸壺、土師器ミニチュア炊飯具形土器・脚付埴・小型壺などがあり、D区で約220個体、A・B区で約100個体を数える。

鉄製品は木棺に使われた釘が大半を占め、D-11号墳では100本近い釘が出土している。ほかに鉄鏃・刀子が数点認められる。銅製品には耳環・カンザシ片・腕輪片、銀製品には耳飾・カンザシ片、ガラス製品には小玉がある。このほかに懸仏1点(南北朝頃、D-3号墳)、皇朝十二銭5点など珍しい遺物も出土している。

今回の調査では、古墳の築造方法や古墳群の形成過程を解明する良好な資料が得られただけでなく、古墳に付属するような形で土壇墓群が初めて確認されるなどの新しい事実も明らかになってきている。

(大津市教育委員会 松浦 俊和)



太鼓塚D-5号墳

4. 古代の生産遺跡

草津市野路町 木瓜原遺跡



左下製鉄炉 右上 須恵器窯

木瓜原遺跡は草津市野路町に所在する、7世紀後半から8世紀前半にかけて操業したと考えられる複合生産遺跡である。

当遺跡は以前より、鉄滓の散布、林道壁面に須恵器窯が露頭していたため、製鉄・窯業遺跡の可能性が指摘されていた。そのため、立命館大学びわこキャンパス整備事業に伴い、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として、平成2年に試掘調査の実施、3年夏より発掘調査をおこなっている。

当遺跡の立地する瀬田丘陵一帯には、古代の窯業遺跡や製鉄遺跡が数多く分布している。そのうちの数遺跡については既に発掘調査がおこなわれており、その内容が明らかにされている。南郷遺跡（7世紀中頃に操業開始）では製鉄炉・炭窯が、源内峠遺跡（7世紀後半に操業開始）では製鉄炉が、それぞれ検出されている。また、当遺跡と同じ谷筋に立地する野路小野山遺跡からは、8世紀前半に操業したと考えられる製鉄炉・炭窯・鍛冶炉・工房跡が検出されている。

木瓜原遺跡では発掘調査の開始から現在までに、遺構では、須恵器窯・炭窯・製鉄炉・鍛冶炉・工房跡・土坑・溝などを検出している。遺物では、須恵器・土師器・鉄滓などが出土している。

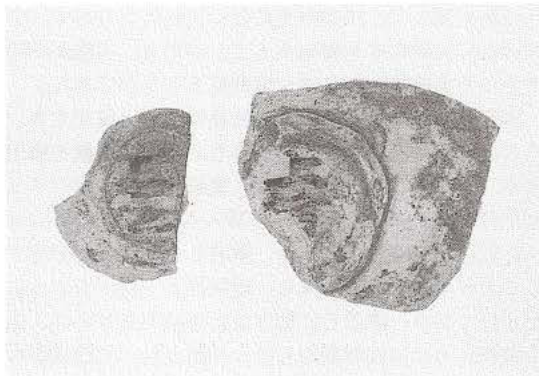
まだ調査途中のため、遺跡の範囲、遺構数、遺構の形態や性格、各遺構の時期等については明確にしがたく、今後の調査の進展を待ちたい。

(財)滋賀県文化財保護協会 藤崎 高志)

5. 幻の寺院跡覚音寺関連遺構発見

草津市山寺町 覚音寺跡

覚音寺跡は草津市山寺町字北谷周辺の山麓に位置する遺跡で、工場建設に先立ち、平成3年1月から9月にかけて発掘調査を実施した。発掘調査前の踏査では



墨書土器 左「上之…」右「上坊」

四カ所の平坦面と平坦面を区画する土塁状の高まりが確認されたため、城館等の可能性も考慮し調査を進めていったが、最終的には後世のものとは判断され、下層から礎石等の遺構が検出された。

検出された遺構は掘立柱建物跡4棟以上、礎石建物跡1棟以上、園池状遺構3基の他、墓跡と思われる隅丸方形の土壇等多数の遺構が確認された。各建物跡は四カ所の平坦面に各々1棟ないしは2棟の建物が存在していたものと考えられ、建物跡の前面に空間地を配するよう計画されていたらしい。特に礎石建物跡の検出された平坦面では炭層および焼土層が確認されており、礎石の一部についても焼け焦げた痕跡が認められることから、火災等により消失したものと考えられる。

遺物では13世紀後半から14世紀代のものが主流で、整地層内出土の近江型黒色土器碗に「上坊」・「上之…」の墨書が認められた他、炭層内からは青磁白磁等の輸入陶磁器や密教法具と考えられる銅鉢等の銅製品が出土しており、特に墨書については、江戸時代の文書ではあるが『志津村山寺宇野保次文書』記載の覚音寺18房の「上房」に当る可能性があることから、今回検出された遺構群が、位置不明であった覚音寺跡の一部として大過ないものと考えられる。

また、周辺の間麓には今回の調査地と類似する平坦面が調査中の踏査で10カ所以上確認されていることから、これらの地域についても覚音寺関連の施設が存在することが予測され、周辺山麓の詳細な調査が今後必要である。

(草津市教育委員会 谷口 智樹)

6. 中世の掘立柱建物群を検出

草津市駒井沢町 新堂前遺跡

新堂前遺跡は、草津市の北東部、栗東町との境界に位置し、従来、古墳時代から平安時代の遺物散布地として取り扱われてきた遺跡である。

今回の調査は、民間開発に伴い行われたもので、中世の掘立柱建物等を検出することができ、実態が不明であった当該遺跡の一端を垣間見ることができた。

調査では、都合10棟の掘立柱建物が図上復元でき、その他、建物を囲む柵列、遺跡など多数の遺構を検出することができた。建物群は、重複状況から少なくとも三時期設定できるが、N30°W～N39°30'Wのほぼ同一の方位を有することから、継続した時間帯で肥握することが可能である。溝も、建物群と平行するように配されており、溝ごとに切り合い等はあるものの、出土遺物からほぼ同時期のものと判断され、当該溝群の多くが、建物の区画用に設けられたものと考えられる。一方、計画的な成立が予想される当該建物群における出土遺物の内容は、近江系黒色土器並びに土師器小皿が主体を占めており、一般集落と何等変わらない状況を呈している。

当該地周辺では、本市馬場遺跡や上笠遺跡、守山市横江遺跡などの中世遺跡の調査が行われており、少しずつではあるがこの地域の中世期の様相が明らかになって来ているが、これらの諸遺跡と当該遺跡との関連性、当該遺跡成立に関する社会的意義など、今後の調査に期待がもたれる。

(草津市教育委員会 小宮 猛幸)

7. 縄文時代前期の竪穴住居と貯蔵穴

栗東町下鈎 しもがり 下鈎遺跡

下鈎遺跡は、野洲川によって形成された沖積平野に存在し、遺跡の付近には、六地蔵の古琵琶湖層丘陵地に源を発する葉山川が流れる。

過去の調査では、弥生時代中期後葉および弥生時代後葉期後葉を中心とする集落などが確認されている。

今回の調査は、倉庫建設に伴う事前調査で、縄文時代前期から室町時代にかけての遺構が検出された。なかでも縄文時代前期の遺構は、まとまった竪穴住居の検出で注目された。縄文時代の遺構面は、表土から約60～70cm下げた地点(標高約98m)で到達する。竪穴住



竪穴住居2とピット群

居1は、楕円形プランを呈し、大きさ約4×3.5m、深さ約40～45cmである。ピットの並びから2回の建て替えがあったことが考えられる。また、床面中央には炭化物が堆積していた。竪穴住居2は、隅丸方形にやや近い不整形円形プランを呈し、大きさ約3×3.8m、深さ約40～45cmである。竪穴住居1同様に、2回以上の建て替えもしくは増築の可能性が考えられる。この他、掘り込みはないが、ピットの並びから建物を10棟以上想定している。この中には約6mほどのやや大きめのものから2m前後の小さいものまで存在する。また、住居のまわりには、土坑がいくつか存在しており、同心円状に配置されていた可能性をもつ。土坑の形態は、円形もしくは楕円形状を呈し、断面がやや袋状を呈している。おそらく貯蔵穴の役割をもっていたのであろう。出土遺物には、北白川下層Ⅱ式を主体に、北陸や中部・関東の影響を受けたものがみられる。石器は、石鏃、石匙、石斧、石錐等がみられる。この他、竪穴住居1から赤彩された耳栓、土坑17から滑石製管玉が出土している。

今回検出した遺構、遺物は、近江という場所がら、東西文化を考える上で興味深い資料となろう。

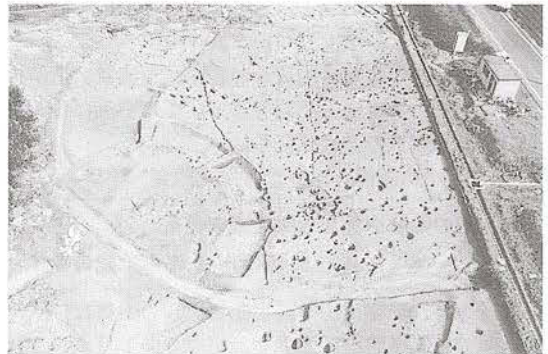
(㈸栗東町文化体育振興事業団 近藤 広)

8. 古墳2基と倉庫群を検出

栗東町 岡遺跡・地山古墳群 じやま

岡遺跡は、栗東町岡・目川・下戸山に所在する。主に古墳時代前期から平安時代の遺跡で、圃場整備事業に伴い1986年から調査を実施しており、その第1次調査では近江国栗太郡衙跡と推定される遺構が発見された。また、今年の第5次調査では、円墳と思われていた地山古墳が墳丘長91mの帆立貝形の前方後円墳であることを確認している。今回の第6次調査は、地山古墳の東側500m、栗太郡衙遺構の北西側に隣接した地域の約2,250㎡で調査を行った。

遺構は、古墳時代の円墳(直径18.5m・周溝幅3m)と方墳(一辺7m、周溝幅1m)各1基、飛鳥時代の土



円墳および建物群

坑、奈良時代の高床式倉庫跡（2間×2間）12棟、平安時代の掘立柱式建物跡3棟以上と溝や土坑、鎌倉時代の掘立柱建物跡等を検出した。

出土遺物は、古墳に残存していた主体部（2.5×1 m）から鉄刀1振りと滑石製小玉206個、円墳の周溝から奈良時代の多量の須恵器や土師器と共に土馬・円面硯・把手付中空円面硯が、平安時代では緑釉陶器や皇朝十二銭（延喜通宝・乾元大宝）56枚等が出土した。また、土坑と円墳の周溝から7世紀の須恵器と共にフィゴの羽口と銅鉾石が出土していることも注目されよう。

今回の調査により、地山古墳を中心とした古墳群に新たに2基の古墳が加わり計11基となり、また倉庫群や土馬・円面硯等の公的 성격の強い遺物の出土等、岡遺跡の性格を知る上で貴重な資料を追加した結果となった。

（朝栗東町文化体育振興事業団 佐伯 英樹）

9. 7世紀の瓦陶兼窯を発掘

栗東町下戸山 山田窯跡

栗太郎栗東町下戸山字狐ヶ谷に所在する山田窯跡群は、金勝川中流域左岸の丘陵谷部に立地する遺跡で、分布調査等から、7世紀代の瓦陶兼窯数基からなる窯跡群として周知されていた。今回の調査は、民間の開発に先立ち、窯跡1基について発掘を行った。



窯内遺物出土状況

窯は丘陵斜面を利用して造られた登り窯と呼ばれるもので、焼成部の床及び、壁の一部が残存するのみであった。規模は、残存長3.5m、幅1.7m、側壁は北側のみで高さ0.4mを測る。窯壁は、スサ入り粘土で作られており、4回の補修の痕跡が認められた。

床面は、3面確認することができた。第1面は、明確ではないものの、階段状の構造が認められ、2面目から斜めの床に造り変えており、2面目の床面傾斜角度は約30°である。この造り変えは瓦を焼いた後、須恵器窯として使用したことによると考えられる。

遺物は、平瓦片8点と須恵器約80個体が出土した。平瓦片は、凸面を縄目タタキ、凹面は布目が付くもの

で、完形品は無い。また、平瓦片の中には焼き台として使用するために加工したと思われるものが1点出土している。須恵器は床面にあるものと、床に埋め込まれたものがあり、器種は、坏身・坏蓋・高坏・鉢・盤・甕で、これらの須恵器は多少の時期差はあるものの7世紀の第Ⅲ4半世紀のものと考えられる。

そして供給先については、須恵器は同一丘陵上の岡遺跡や北方約2 kmに所在する手原遺跡等と考えられるが、瓦については瓦当の出土が無い事や、須恵器に先行して焼かれた可能性などを考えると、時期的な問題を検討した上で供給先を考えていく必要がある。

（朝栗東町文化体育振興事業団 佐伯 英樹）

10. 木製の埴輪が出土した帆立貝式古墳

栗東町安養寺・川辺 狐塚遺跡

狐塚遺跡は、栗東町安養寺・川辺に所在する遺跡である。今回の調査地は、遺跡名の由来となった字狐塚地区にあたり、両側に近接する安養寺山の山麓には、新開古墳・椿山古墳をはじめとする中期の有力な古墳が点在している。

今回検出された遺構には、帆立貝式古墳、方墳、掘立柱建物、土坑などがある。このうち帆立貝式古墳は全長約32mのもので、後円部径26m、前方部幅は12.5mである。墳丘はすべて削平されているが、馬蹄形周濠を有しており、検出面からの深さは約50cmを測る。注目されるのは、周濠の最下層から出土した豊富な木製品である。これには「木製の埴輪」といわれる蓋形木製品や鳥形木製品、鋤、細長い棒状の木製品、板材等がある。蓋形木製品は、直径30～40cm程度のもので、直径約20cm程度の小型のものがある。鳥形木製品は、鳥が飛んでいる姿を上から見た形を真似たタイプで、頸部・胴部のみが残存長が64cmを測る大形のものである。細長い棒状の木製品には、長いもので4mを超えるものまであり、周濠底全体にわたって多く出土している。古墳出土の木製品に伴う可能性がある柱穴の存在



帆立貝式古墳

も注目される場所であるが、本調査地では周濠底に2個みつかったのみであった。

周濠底から出土した遺物には、ほかに円筒埴輪・朝顔形埴輪・須恵器・土師器があり、これらの遺物から古墳の年代は6世紀前半と考えられる。

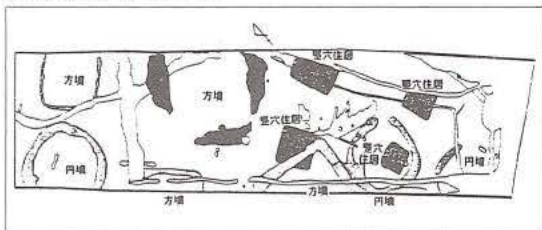
古墳から木製品が出土する例は、県内はもとより全国的にみても稀少であり、古墳における葬送儀礼や、その地方的展開、古墳の構築物等について知り得る貴重な資料である。

(勸業東町文化体育振興事業団 雨森 智美)

11. 竪穴住居と古墳群を検出

守山市下之郷町 吉身西遺跡

吉身西遺跡は県立成人病センターを中心に広がり、縄文時代後期から平安時代中頃にかけての遺跡である。今回の調査は倉庫建築に先立つもので、約1,700㎡を対象とした。検出した遺構は古墳時代の竪穴住居、溝、古墳などの跡である。



遺構平面図

竪穴住居はほぼ同じ方位をもち、1辺4m~7mを測る。4棟検出した中で2棟の掘削を行ない、うち1棟は内側に約3.5m×4mの規模で一段低くなっており、拡張された建物かと考えられる。もう1棟の建物は東半分を後世の溝跡に切られていたが柱穴を良く残していた。ともに出土遺物から前期とみられる。

横断する東西方向の溝は幅約1.5m、深さ1m前後を測るV字状の溝である。これと交叉し横断する溝もV字の溝で前期の遺物が多く出土した。

古墳は全部で7基検出し、内訳は方墳4基、円墳3基である。部分的に溝が途切れて陸橋部となるもので多く占められる。方墳の1基は四隅に陸橋部があり、真中で幅広い周溝を有するものである。遺物は北溝から円筒埴輪や市内で4例目になる鶏形埴輪が出土した。埴輪が出土した古墳はこの1基だけで、他は土師器や須恵器のみであった。ほかの古墳の遺物も含めてこれら古墳群は6世紀代に築造されたと考えられる。この時期にあたる古墳は同じ遺跡内や近接する遺跡からも発見されており、これら古墳群との関係も注目される。

(守山市教育委員会 畑本 政美)

12. 旧河道から大量の木製品が出土(第5次調査)

守山市古高町 下長遺跡

工場建築に伴うこの調査は昨年からの継続事業で、約1,200㎡を対象に実施した。下長遺跡はこれまでの調査で縄文時代晩期に初めて集落が形成され、その後何回か盛衰を繰り返し、古墳時代前期頃にその盛期がピークに達したことがわかっている。今回の調査でも古墳時代前期の集落と旧河道が検出され、微高地に形成された集落の様子がより明らかになったといえる。旧河道内からは古墳時代後期以降とみられる水田を検出したが、プラントopal分析からさらに数面の存在が考えられる。この下層からは微高地に沿って南北方向に平行して走る畦畔状の高まりを2条、約30mにわたって検出した。幅50cm~1.5mで、土止めであろうか両端に杭が打ち込まれていた。性格はよくわからない。この旧河道からは大量の土器と木器が出土した。木器は鋤・鍬・竪杵・田下駄などの農具、弓・錘・櫂・あかすくい・紡錘車などの労働具、槽・盤・箱などの容器、舟形・刀形・矢形などの形代、梯などの建築部材等、多種にわたる。中でもナスビ形着柄鋤の柄の部分ほぼ完形品で出土したのが注目される。

下長遺跡は縄文時代晩期から平安時代にかけての大集落である。古墳時代だけをとってみても旧河道が埋没する過程での土地利用の問題や小型仿製鏡・韓式土器などの遺物が出土する掘立柱建物で構成される集落の性格など今後解明されなければならない問題は多いといえよう。(守山市教育委員会 小島 睦夫)



下長遺跡南側全景

原稿募集のお知らせ

当協会では、「滋賀文化財だより」の原稿を募集しております。滋賀県内埋蔵文化財関係者の情報交換の場として大いにご利用下さい。

連絡先: 勸業滋賀県文化財保護協会 Tel: 0775-489780